

2010.6.24 (木) 曇り時々晴れ 低気温 低湿度 稜線やや風あり	飯豊山域地蔵岳 地蔵岳 1,539m 大日杉登山小屋 612m (標高差 927m)	(1471) A/I 同行者 I/K
---	---	-----------------------

行程 新津 4:30→大日杉登山小屋 7:05→地蔵岳 9:40→目洗清水 10:35~10:50→地蔵岳 11:55~12:25→長之助清水 13:25~13:35→大日杉登山小屋 14:10→新津 17:30

悲惨 大日杉ルートの姫小百合

一瞬、人為的行為によるものかと眼を凝らした。ヒメサユリの花がむしりとられている。どの株も花柄の先端から同じようにむしられている。10 数年もかけて成長する 1 株に 5~6 個の花を付ける株も同様、見るも無残、そよ風に葉のみを揺らしていた。獣害(鹿)としか考えられない。被片はただの一枚も落ちていない。きれいさっぱり食べあげるものだ。「地蔵岳」から「語らいの丘」まで、小さい蕾を付けた株を除き登山道のかたわらの 90%は無残であった。登山口より標高差約 900M、約 2.5 時間を要して山岳に咲き競うヒメサユリを楽しみに、喘ぎながら上がってくることと思うと、この情景は残念無念としか言いようがない。



早朝 7 時 5 分とんがりぼうの大日杉登山小屋前を出発する。低気温、低湿度の快適条件。連日の降雨で杉林の道はぬかり気味。ひんやりする樹林の向こうから聞こえる 沢音が心地よい。ブナ林の中、さんげ坂の最後には真新しい太いチェーンが張られていた。尾根上に飛び出せば勾配は急に緩む。時々姿を見せるブナの大木の根が、登山道にびっしり張り付いているが、訪れる人が少ないのか道は掘れていなく、浮き根もなく安心して歩ける。長之助清水を過ぎ、しばらくすると杉の大木のある御田である。小休止。

歩き始めてすぐに、飯豊町よりヒメサユリを撮りにきたという、ニコニコ顔の 79 歳の男性に出会う。若い。地下足袋姿に手製の独特の曲がりのある重そうな杖をついていた。しばし歓談。方言が理解できない。ルート南側の沢筋のエリアは、熊の猟場であると話していた。よほどカメラが好きなのだろう、早朝家族に内緒で出てきたと話していた。「気をつけてお帰りください」と心に念じつつ先行し別れた。

ブナ林の尾根筋の登山道は次第に勾配を増す。灌木帯に入れば、程なく標高 1,409M のピーク、北北東にルートをとる鍋越山への分岐、滝切合である。倒れ朽ちそうな道標の脇には、灌木にびっしりと覆われて、かろうじてふみ跡を残していた。半袖の身、時より吹きか

ける風が冷たい。左側にヒメサユリの花咲く地蔵岳より種蒔山（切合小屋）に伸びる穏やかな稜線が目前に望めれば、なんの特徴もない（地蔵様跡に失礼）地蔵岳（標高 1,539M）は近い。

地蔵岳を背に一路南進、程なく雪溪の上にダケカンバの林だ。ルートをそれ膨大の量の雪を残す雪溪に下りてみた。乳白色の木肌に瑞々しい新緑の若葉が、初夏の陽に映え風に揺れていた。

灌木のトンネルだ。肩越しに鶯が鳴いている。見上げるとタムシバの花が蕾を従い清楚に咲いている。足元にはカタクリが、ユキザサ、マイズルソウが先を競って咲いている。花々の競演だ。「語らいの丘」より先、ヒメサユリは無事だった。気が急いでいた同行者の表情がみるまに緩み、安どの表情が広がる。

清楚、可憐な姿。薄いピンク、筒形に一杯に膨らむ蕾、横向きに満面の笑みを魅せている。

顔を近づけてみる。濃厚な甘いにおいがする。ヒメサユリの花々は目洗清水まで続いていた。



雪溪が後退した湿り気の残る斜面には、シラネアオイが今を盛りと咲いていた。森吉の石森のピーク付近で咲いていた、紅色の花を思い出していた。目洗清水に到着。飯豊本山を仰ぎ見るが、頂は雲の中。ニッコウキスゲの芽吹きの中で数十分待ったが、刻々と表情を変える雲はとれなかった。

小さなこぶを数えながらの帰路。10まで覚えていたが、写真撮りや山菜採りに夢中になり、いくつあったか解らずじまい。振り返れば、K字状の雪溪が一際穏やかに横たわっていた。下り道はやはり早くなる。脚に疲労が出始めたころ、長之助清水に到着である。同行者の美味しい水との言に水場に降りてみる。蛇と見間違える色のザイルを頼りにトラバース。



1分弱の近場の水は冷たく美味しかった。

沢音が聞こえてきた。まもなく登（下）山口である。

喘ぎながら登っていた山中でただ一人の出合者、79歳のヒメサユリ撮りの男性は、ヒメサユリに出会いたであろうか。そして無事に家に帰りついたであろうか。そんな思いが頭によぎる。

小屋前で岩魚釣りより戻ったばかりの釣師に会う。フィッシュバックの中を見せてもらう。見事、尺超えを含む5匹の岩魚が収まっていた。